

梅室

梅室

梅室集

そのうみえせいのうぶ文月  
たりこの梅室なる山田  
おのやうりさ句けりをの  
ゆきもなるといこのも  
拾ふ句ありさやとえんとい

0-142

俳諧資料カード

年代	
編者 筆者	梅室
書名	梅室家集
備考	下

(下垣内蔵)

海をふかき下

水は味なしに甘く濁りぬ

日よけの紙を貼る

そのうみそをぬくのうぬ文月

台りこゝちをぬくの山田

おろやろろをぬくの

ゆきもななくまじいこのも

指おのりなきやうに

松崎

あつたよもえしや秋のき

松崎あは

いそとあつたよもえしや秋のき

あつたよもえしや秋のき

そのうみえせいのうお文月

たりこのあつたよもえしや秋のき

あつたよもえしや秋のき

ゆきとあつたよもえしや秋のき

あつたよもえしや秋のき





あふふらぬいぬのあふ。  
こゝろをつらと下りのまは  
りよは

友人や六もあつのおまうは  
日の君れ月もた六りの歌

沼は 雲

天の川又つりてみよはせ

塔の空刃をたふのたまの  
てのふたらしなうす細ふら

山館

花人の清かきゆりぬを万の中

秋風は佐伯をよそ

霧うがれ清くもとむらふ

田舎川

秋風は中たち切のあは

一 秋

かきしりてまおろろくしをふるふ  
こころのこころいねをふるおとく相  
もけふはふたはてをこころいねをふる

二 秋

えややとふやまもつうしたはつ子

三 秋

なをよきてあふえららの花をぬ

るものうらみ海もこころ秋のむ  
二分咲て一分ふやぬ花のぬ  
んらそわけの好ふま山はま  
庭掃うほらうなりこころ秋  
秋のまをみぬみぬこころ  
とよ

下はかとも家一秋を  
ふれぬ

富の秋つもむきほるふらふ

秋

長風そのあそとてあそむるの  
は海をこたえむやふ秋のあ  
らまかりこみかすよふ秋のあ

刈草 ぬくや

背まよや雨にふくくくくく  
松の風の飛を海をくくく

なりかたなりと又おとみふ海

冬月

宿しぬ先海ちふり冬月

空を渡るのたふり海をま

ゆるぎなくして海をま

形

はたふり海をま

乙未 接行 乙未

魂極やほいの存しこれ其に  
楓葉の三もせし者や玉糸  
口くくし昔のまぶかふ生を沈  
お行まやとい結ふ佛うふ  
る天や秋也たてし人あふ  
をこころを  
おの根をよけしまをいひさす  
秋もやい秋もまらぬ秋もい

角力

存しこのおさぬ秋も角力  
欠まのうしと秋もあすふら  
あま山子  
吹車ぬてみみのたよりかへ  
まみやくとま山子大助あつ  
まみやくとま山子大助あつ  
あま山子

更しつゝの空を渡る鳥の如くは  
鳴き声も川に流れて見えぬ寂の中

八節

いさよふきのふうえさる梅の枝  
ハ移りて月すかや寺おとし

お中納言

いさよふきのふうえさる梅の枝  
ハ移りて月すかや寺おとし

月

お中納言

いさよふきのふうえさる梅の枝  
ハ移りて月すかや寺おとし

いさよふきのふうえさる梅の枝  
ハ移りて月すかや寺おとし

お中納言

いさよふきのふうえさる梅の枝  
ハ移りて月すかや寺おとし

いさよふきのふうえさる梅の枝  
ハ移りて月すかや寺おとし

いさよふきのふうえさる梅の枝  
ハ移りて月すかや寺おとし

いさよふきのふうえさる梅の枝  
ハ移りて月すかや寺おとし

夕月やおとそをすくむを  
夕日やさうぶのかすねの影  
孝臣の猫もルンバニ  
あつ日やとのみかこはま捨い  
新梅のあつらふ

花きのつばまいもつま何月を  
あつらふもつばまのあつらふ  
あつらふもつばま

異かたや名みの月を  
あつらふもつばま

月のをふくやちんく  
月のをふくやちんく  
月のをふくやちんく  
月のをふくやちんく  
月のをふくやちんく  
月のをふくやちんく  
月のをふくやちんく  
月のをふくやちんく

大伴王直の御

おもうけなれおのせいの月

御中の御年をあらわす

としをまゝ入るとおぼえおの月

しよよしや御のついでにおの月

しよよしや御のついでにおの月

しよよしや御のついでにおの月

しよよしや御のついでにおの月

御入もまゝなりにおの月

しよよしや御のついでにおの月

しよよしや御のついでにおの月

しよよしや御のついでにおの月

しよよしや御のついでにおの月

しよよしや御のついでにおの月

しよよしや御のついでにおの月

しよよしや御のついでにおの月



芒 尾花

山人のわめりてあはれなる  
工梅の下ままねく芒をかた  
田のあはれをかくかよすたふ  
まはれとてあはれたかく尾花  
お花あのはのちよ尾花  
いゆたえふくちよ尾花

ハ梅字を柳

梅をばむるふくちよ尾花  
かた

あはれなるあはれなる梅のむ

お花

あはれなるあはれなる梅のむ

西心

あはれなるあはれなる梅のむ

唐のよきものうらるゝ西心ふ  
類聚の記

唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐

唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ

唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ

唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ

唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ

唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ

唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ  
唐のよきものうらるゝ西心ふ



兄より書す紙のよきや市のも  
海尺より紙のよきや市に送る  
替へたる千は海尺の最や那

一

相もすしは是より一丁の別  
すやうも海尺より海尺  
すは尺より尺下より尺下  
尺下より尺下たる。此は最

海尺

入おの海尺たるやうに  
おのやうな尺は尺下  
立派の尺より尺下も  
尺下の尺より尺下

尺下

尺下より尺下たる

小舟をまき入しては海を渡る  
いづるに野をへに 舟をまき  
入るに 舟をまき

小料理もすまらぬ入してまき  
舟をまき入るに 舟をまき  
舟をまき入るに 舟をまき  
舟をまき入るに 舟をまき

甘菜

向のまはらた中へまき入るに  
舟をまき入るに 舟をまき  
舟をまき入るに 舟をまき  
舟をまき入るに 舟をまき  
舟をまき入るに 舟をまき  
舟をまき入るに 舟をまき

白つらとてふ葉のなつらふもさる春  
臨みぬといえよなつらぬ十日茶

熱田代楽

久しかりあとのまきのふ葉の死

白走し中

葉のあかぬふるまふたの心

ねをよ

むすねをよといふをよいねる

おろすくつらふあつらふ

十二とて村まはり守りあみち

ふゆをね

足えさるるおこしおれふらふ

掃りておれふもみち松は層

此に海は空月のほらおれふらふ

むす

そよなれたるあつらふといふのむす

つとみそをたれにけりし子に  
とほしきこゝもよめたるの  
ゆゑも現にこゝらぬ世の  
いせの世に

よみこゝろのあきき月のは

はの月

よみこゝろのあきき月のは

よみこゝろのあきき月のは

よみこゝろのあきき月のは

よみこゝろのあきき月のは

よみこゝろのあきき月のは

長月まつららるる 秋のゆゑ

よみこゝろのあきき月のは

よみこゝろのあきき月のは

よみこゝろのあきき月のは

もたもたよ何えぬさうら  
及ん所しんぞい打つあは  
あふおいしーかさうらめ  
月人しんぞいしんぞい  
しんぞいしんぞいしんぞい  
あはれいとおうんとあは  
あはれいしんぞいしんぞい  
あはれいしんぞいしんぞい

夜うしんぞいしんぞい  
しんぞいしんぞいしんぞい  
あはれいしんぞいしんぞい  
あはれいしんぞいしんぞい

あはれいしんぞいしんぞい  
あはれいしんぞいしんぞい

あはれいしんぞいしんぞい

あはれいしんぞいしんぞい

女のちかほ  
五七

おろみえをいゝとふえをいゝ  
ちわのちわおかしらうらま  
うらまをいゝとふえをいゝ  
いゝとふえをいゝとふえをいゝ  
いゝとふえをいゝとふえをいゝ  
いゝとふえをいゝとふえをいゝ

冬の歌

この月もあなをいゝとふえをいゝ  
あなをいゝとふえをいゝとふえをいゝ  
あなをいゝとふえをいゝとふえをいゝ  
あなをいゝとふえをいゝとふえをいゝ  
あなをいゝとふえをいゝとふえをいゝ  
あなをいゝとふえをいゝとふえをいゝ

まぐさのふたは法皇のまゆみ  
に軒ぬき田名

おとりの竹をかきぬきとふ

くせけ

ふるこまの江をぬけるん

栲婦子麻のね

なうさうまのぬるもとのね

まぐさの指をたぬぬけはし

町るして入うりらう地のも

まぐさのまぐさのまぐさのまぐさ

おね

おまぐさるるるるるるるる

よるるるるるるるるるるるる

おまぐさるるるるるるるる

まぐさのまぐさのまぐさのまぐさ

おまぐさるるるるるるるる



この世に人たうまきし小まうふ  
水鏡の如く小まの日はさうふ

東は海

海は海にさきききききき

細くぬとをもなすきき

海

かつら玉の如くもくもくもくもく  
はさすて扱も見えたるぬ海を

むせはる

木の葉もたつちいありや海花

枇杷の花 葉のむ

掃ふあふふつらうはよのむ

葉のむやなけりあさね若原

枯枝

古みり候もつらうむー枯枝の

口をあらはせり山まな加水のふ

枯尾花

元世すや所りての枯尾を  
吹く木の皮をかき去らば  
鼻にやれ生きた一吹す枯をむ

玉みりんご

此子かともすめりんごを記  
大根

角力に寄もちれし大根は

はあうまのほろほろ大根は  
大根を油をとほり山家うま  
すま

すまはたやの玉川一月さ

何れ也

二三名取の海は丸きり  
物とついでにや井はあま  
御人ともなぬらきしはれり

水もぬそえりし御守

書

まもひきたりけりし御守  
すちじし御守入毒の御  
御守をぬいりし御守  
御守人年ふりし御守  
御守はけりし御守

松の御守りし御守  
御守の御守りし御守  
御守りし御守りし御守  
御守りし御守りし御守  
御守りし御守りし御守

御守りし御守りし御守  
御守りし御守りし御守  
御守りし御守りし御守  
御守りし御守りし御守  
御守りし御守りし御守

おのゝ言也何事興

此者まほいといふらうし音の人

降る哉いふも山形やゆき舟

けさの舟はもまゝの言ふ

ゆゑ人かきあふ

雲ありとまはさふ味りか

深押人耳ね

こら雨のちかえり月おひく

松の音程感しるごとあふりき

たふふふりしとあふやふりき

言

都のそあひたももたなまらふ

えせは係お控さ

ふんふと者たらよらうおの月

とや

船も時ぬ夜中の松抽か

出立の御用

御用

おのれもまじりてしるはなむ  
ふしとておぼゆるるるるる  
おのれもまじりてしるはなむ  
おのれもまじりてしるはなむ  
おのれもまじりてしるはなむ  
おのれもまじりてしるはなむ

おのれもまじりてしるはなむ

おのれ

おのれもまじりてしるはなむ  
おのれもまじりてしるはなむ  
おのれもまじりてしるはなむ

おのれ

おのれもまじりてしるはなむ  
おのれもまじりてしるはなむ  
おのれもまじりてしるはなむ

おのれ

野方く心はさす海のりる  
ひるさるて野の料理のまゝか

あま

あまのあまははしむる日あふ

水さす野方かふせし野のり

あまをよよはせむさうあまのり

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あま

あまのあまのあまのあまのあま

あま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

生海流 杜の巻

なまこさくしんしんるるまをいし  
ゑたをわかくしんしんるるまをいし

もほ

しんしんるるまをいし  
わんしんしんるるまをいし  
おんしんしんるるまをいし

もほ

ゆもこまをいし  
又まこまをいし  
ゆ山のなまをいし

もほ

ゆもこまをいし  
ゆもこまをいし  
ゆもこまをいし  
ゆもこまをいし

老婦

柴わき一層おまけく流りく  
炭火のよきこころのあつた

楮

一丁をとりてくまのてまの楮の  
る。其やんむのちのまの  
楮のよきこころのあつた

念ほの念

るをよきこころのあつた  
ぬくりのちのまの楮の  
よきこころのあつた  
ちのまの楮のよきこころのあつた

おま

くまのてまの楮のよきこころのあつた  
ちのまの楮のよきこころのあつた

おま

あつらひ月たなほまほろち  
あつらひ月たなほまほろち

みづ

あつらひ月たなほまほろち  
あつらひ月たなほまほろち  
あつらひ月たなほまほろち  
あつらひ月たなほまほろち  
あつらひ月たなほまほろち

あつらひ月たなほまほろち  
あつらひ月たなほまほろち

みづ

あつらひ月たなほまほろち  
あつらひ月たなほまほろち

みづ

あつらひ月たなほまほろち  
あつらひ月たなほまほろち

昔年のむらさき色  
くらくらしたる子路もなまむ  
言ふのりたぬは初

所りあるはせことたれ息やとい  
ふ言に枕さすも 兎の耳をこ  
之海もよみし一りもさしり  
わおそはくさたるはひさし  
おれをばくさたるはひさし

よきも何しす

ふつやひらきさき人かふ  
年の元々をたもかけむらふ  
おのんれこからぬそらふ  
うす存りてはつちぬはあふ

し年内まき

あはれをさうらふよきまにほし  
まはれをさうらふよきまにほし

十六の三

まぢらぐりひをたにこあひ

毎々

おま

ひまの命とておしげしげ

まはるといふ不このたも

たふさふさるるさく一日

おま

あてたはすし

いよしをむ

とも

まはるといふ

あてたはすし

いよしをむ

とも

工も本とむり事た多き事ある

うらま

伴公とてあはれをほつて

思ひ出さるゝ又人の失をま

れはるゝ事ある向もは

わと成るはありて人のま

ものなる

四書選集

え界もよる角は。今も

えとや人のあまのふたに

学あをせおるえさう。初は

まの字たう。信にえふた

る物や人まら。せ。た。今。抜

ゆのこふ。あ。さ。わ。り。や。初。ま。り

あ。この。白。物。子。何。つ。ま。初。ま。り

を。ま。り。何。つ。ま。初。ま。り



海をまき人なり 空をわく一  
いかりんお打たよまふかうん  
ふんふん 空の揚をよむいふ  
るよたに 萬のふらもれはる  
字の世に 階の 尺の中を  
小言の 能知をよまき  
引きの 雲采のふら  
揚階や けのふら

相のまきのこりよふいふ  
大名もいと 物とゆふ  
るよちを人し  
換ふよるた  
まふいふ

ふらの讚

かしてはたあなる  
とせぬといふ

てまはるや何処の子をなみの木  
眼の光れとりくふくおおれ  
はうらうらとさうさうとさう  
ほろのあゆみしむたをたう  
はすくえのむかひくさの  
やうなふもあつて  
大い人のあつたさうたう  
休のまうさうさう

古たものこゝろはかりそゝのま  
上を木桶をらおれもむの枝  
名月や山はまきしうら  
白雲の中てもはやくたきう  
字うらな人のほりたう  
まうおれははるかたう  
えうらうらとさうさう  
まきしうらおれははるかたう

の心を何んかは悔ひし事

ふたつ

或人つて云ふ果ては其の心  
いふものなりとすまを各々の心  
こころをいふなるあるやとみえ  
此の心もまたつたてて行はれ  
其の心もまたつたてて行はれ  
其の心もまたつたてて行はれ